あけぼの

発　行
西区人権尊重連絡会議
(事務局)
西区生涯学習推進課
(☎895-7027)(FAX882-2137)

令和4年度「西区人権を考えるつどい」

講演　トーク　「ぬくもりのある人権のまちづくりを目指して」

一人芝居　学校(山田洋次監督作品)

講師　福永宅司(ふくながたくじ)さん

令和4年8月26日(金)、西市民センターにて、元小学校教諭で、現在は〝一人芝居活動家〟として活躍されている福永宅司さんをお招きして、「西区人権を考えるつどい」を西区人権尊重連絡会議及び西区役所の主催で開催しました。

講演前半は福永さんによるトーク、後半は一人芝居という構成で行われました。

●トーク

福永さんは、2018年12月から自宅を拠点にご夫妻でフリースクール「みんなの学び館」を開設され、「学校になじめずに行けない子どもたち」などを受け入れる活動に取り組まれており、そのことを、映像を交え紹介されました。

また、人権問題の解決のためには、まずは身近なところから考えよう。家族に対して「ありがとう」と言えているか。このような小さなことの積み重ねが人権問題の解決につながるのでは、というお話でした。

●一人芝居

演目は山田洋次監督の作品「学校」。様々な理由で義務教育を受けられなかった人たちが通っている夜間中学校の物語です。

物語の前半は、夜間中学の教師・黒井が、卒業記念文集のための作文の授業で、原稿用紙にそれぞれの思いをつづる様々な職業、年齢の生徒たちの横顔を見ながら、彼らとの思い出を振り返る場面。

孫もいる年になって入学してきた在日韓国人の女性・オモニなど個性的な人物を、福永さんはユーモアを交え、まるでスクリーンを見ているかのように熱演されます。

どんな境遇であろうが、『誰にでも勉強する(学ぶ)権利はある』との福永さんの熱い思いが伝わってきます。

物語の後半は、その日の給食の時間に、クラスの一員・イノさんの訃報が届く場面から。突然のことに悲しむ黒井と生徒たち。ホームルームの時間、黒井はイノさんの思い出を語り始めます。不幸な生い立ちとその後の苦労、突然病に倒れ、帰らぬ人となったイノさんの人生を語り合ううち、いつしか黒井と生徒たちは人間の幸福について話し合うようになります。

福永さんの渾身の舞台によって、〝幸福とは何だろうか〟と問いかけられた参加者の方も多いことでしょう。

最後に福永さんは、「知らないことが差別につながる。だから勉強が必要。人をこうだと決めつけない、物事を多角的にみることができる知識が必要。そうすることで差別がなくなり、私たちのまちも住みやすくなってくる。」と語られ、講演は終わりました。

【参加者の感想】

○トークも一人芝居もとても楽しく見られました。最後に、知らないことは差別になると言われており、日ごろから考えるべきだと思いました。

○「まずは家庭の中の人権を大切に」という言葉が一番ひびきました。一人芝居もとても引き込まれました。

○一人芝居は映像が頭の中にしっかりでてきました。まずは知ることから、自分に何かできるか、できることから少しずつやっていきたいと思います。

第51回福岡市人権を尊重する市民の集い

講演「いのちをみつめて」～お芝居とおはなし～

俳優　有馬(ありま)理恵(りえ)さん

令和4年12月9日(金)、西市民センターにて、俳優の有馬理恵さんをお招きし、「いのちをみつめて～お芝居とおはなし～」と題された人権講演会を開催しました。生い立ちと原体験をもとに、「釈迦内枢唄(しゃかないひつぎうた)」の芝居の一部、東日本大震災、差別や戦争、人間の尊厳について、生命力あふれる迫力ある「おはなし」をしていただきました。

●高校時代に「釈迦内枢唄(しゃかないひつぎうた)」を観て衝撃を受け芝居の道へ

有馬さんは高校2年生の時、「釈迦内枢唄」を観て衝撃を受けます。秋田県の釈迦内において、火葬場で仕事をする主人公が差別を受ける中で「人間はみな平等である」ことを描いた水上勉氏の原作です。

【参加者の感想】

○迫真の演技に引き込まれ、胸が締め付けられる思いでした。有馬さんの魂の叫びであるお芝居を全部見たい。感動しました。

○世の中の底辺に置いてけぼりをされた人々の苦しみが演技を通してよく伝わり、差別に対する怒りがこみ上げてきました。

○差別の根が深いところにあることをお芝居を通して理解できました。涙が止まりませんでした。

令和4年度　西区 暮らしの中の人権講座

映画上映『今日も明日も負け犬。』

「西区 暮らしの中の人権講座」は、暮らしの中の様々な差別や偏見に目を向け、身のまわりの人権問題に対する理解を深め、〝人権を尊重し、人の多様性を認め合うまち〟の実現をめざして開催しています。

今年度は6月17日に『今日も明日も負け犬。』という映画を上映しました。

この作品は、朝起きられないという症状がある病気「起立性調節障害」をテーマにした、高校生で監督の西山夏実さんの実体験に基づく作品です。監督ばかりでなく主演、原作、脚本など、女子高校生28人で作った映画です。

「起立性調節障害」という周囲になかなか理解されにくい病気を扱っていること、制作スタッフが全員高校生であることが注目を集め、TVや新聞で紹介されるほか、海外の映画祭でも上映されています。

上映会当日は、この病気のことを初めて知ったという方ばかりでなく、お子さんが当事者であるという親子連れも複数いらっしゃいました。

【参加者の感想】

○3年前から私の娘も起立性調節障害で苦しんでいます。なかなか理解してもらえない病気なので、このような形でいろいろな方に分かってもらえる場が増えていったらいいなと思いました。

○娘のお友達が今現在この病気とたたかっています。友人として、友人の母として何ができるか考えたくてここに来ました。胸がいっぱいで涙が止まりませんでした。

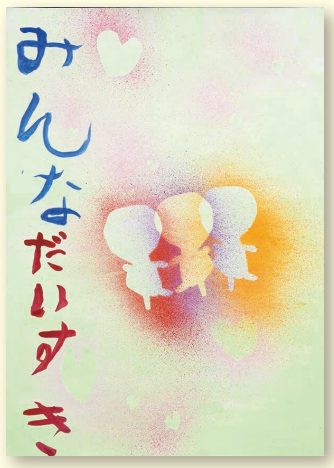
○人の苦しみはさまざまですが、こういう機会にいろいろな病気を知って、皆が生きやすい社会になったら良いと思いました。

令和4年度入選作品（西区内）

毎年12月の人権尊重週間にあわせて、福岡市が募集した
標語やポスターのうち、西区内の入選作品を紹介します。

玄洋小学校 2年　木村 優香さん

福重小学校 1年　吉田 彩花さん



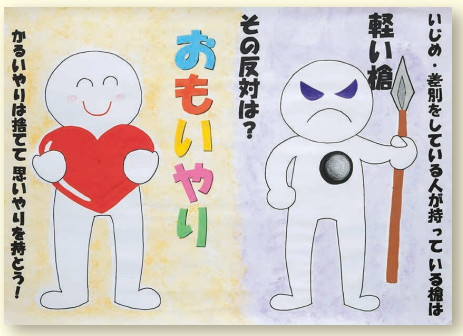
壱岐小学校 1年　春田 琉天さん

西都小学校 5年　浅賀 花音さん

止めようよ
SNSでの
悪口を

西陵小学校 5年　久保川 美織さん

さあめざせ
きずつく言葉を
ゼロにする



壱岐中学校 1年　岡部 ル子さん

壱岐小学校 4年　春田 璃凪さん

西都小学校 6年　木浦 亮人さん

考えよう
自分は軽い気持ちでも
相手にとっては重いことかも

愛宕浜小学校 6年　大廣 真輝さん

ぼくたちで
いじめスイッチ
オフにしよう

周船寺小学校 6年　児玉 龍星さん

君と僕
心のwifi
つながってるよ

人権が尊重されるまちづくりをめざして

『だれもが思いやりを持ち、すべての人に優しい町に』

壱岐校区 人権尊重推進協議会

43年目を迎える壱岐校区人尊協は、同和問題をはじめとする全ての差別の解消をめざし、多くの取り組みを行ってきました。

昨年度は、コロナ禍の中、感染対策を徹底し、委員研修や講演会を実施しました。また、人権標語を小学校5年生、中学校2年生、特別支援学校高等部から募集し、優秀作品、最優秀作品を自治協役員や委員の方々に選考していただき、横断幕にして各学校に寄贈いたしました。

本年度は、9月に委員研修として能古博物館に出向き、「戦後日本最大の引揚港としての博多港の歴史」について学びました。様々な差別を「まず知ることから」、そして「自分のこととして考えよう」を基本に、思いやりのある優しい町づくりを進めていこうと話し合っています。

『心豊かな住みやすい町づくり』を目指して

北崎校区 人権尊重推進協議会

北崎校区人尊協では、「人権問題に対する認識を深めるとともに、身の回りに存在する様々な地域課題の理解を図り、一人ひとりの人権を尊重する心豊かな住みよい町づくりを推進する。」をスローガンに様々な活動を行っています。

活動の主軸は、町内会毎に集会所に集まり、様々な差別に対する学習を行う「町別人権学習」です。

小学生から高齢者まで幅広い年齢層が参加します。ある町内では中学生がグループワークの司会者となり、参加する幅広い年代の意見を取りまとめ発表しています。大人も中学生をサポートし、全員で学習に取り組んでいる姿は北崎校区人尊協の特色であり誇りでもあります。

今後とも「一人ひとりの人権を尊重する心豊かな住みやすい町づくり」を目指して活動を進めていきたいと思っています。

コロナ禍以前の「町別人権学習」の様子

編集後記

ここ数年、新型コロナの感染拡大の影響で様々な行事や活動が制限を受け、地域や学校などでの人権啓発活動が思うようにできない状況が続きました。しかしながら、ワクチン接種の普及などで、行動制限が緩和され、様々な行事が再開されてきています。人権啓発活動についても、感染防止に留意しながら徐々に活動を再開しているところです。今後とも、皆様と一緒に住みよいまちづくりに向けた取り組みを進めていきたいと決意を新たにしています。